

第12回 日本の未来塾

高度経済成長期以降の日本人の意識変容は 社会運動を衰退させてしまったのか？ ：安定成長期において労働組合運動・社会 運動はどのように認識されてきたのか

富永 京子 氏 立命館大学 産業社会学部准教授



プロフィール

1986年生 北海道大学経済学部卒業

東京大学大学院人文社会系研究科修士・博士課程終了

日本学術振興会特別研究員を経て、2015年より現職

近著に「社会運動と若者」「社会運動のサブカルチャー化」「みんなの『わがまま』入門」など。

テレビのコメンテーターなどでも出演多数

研究テーマとしては、若者文化におけるメディア・コミュニケーション、社会運動をめぐる「離脱／燃え尽き」の問題、私生活における政治的・非政治的領域の葛藤など若者文化、メディアの社会的な分析を行う。

1. はじめに

ご紹介いただきました富永です。普段から連合と連合総研の皆さんには大変、お世話になっておりまして、どちらかといえばこれまでは終了した研究について話させていただくことが多かったです。例えば大規模調査の結果と社会学理論を合わせた内容であるとか、若年層の安保法制抗議行動・脱原発運動あるいはフライデーズ・フォー・フューチャーですとか、現代の運動に関わっている若者の聞き取りをしたことが多かった。実務家向けの方の研究者としての助言という口幅ったいのですが、そういったポジションで講演することが多かったのですが、せっかく今回、「日本の未来塾」という場をいただいているので、今やっております研究について若手の多様な研究者の方たちと連合・連合総研の皆さんからいろいろと忌憚ないコメントをいただければと思いますので、よろしく願いいたします。

私は、社会運動論というよりは、現代史みたいなものに近いと思うのですが、そういった研究をしています。タイトルとしては『高度経済成長期以降の日本人の意識変容は社会運動を衰退させてしまったのか』というところです。芳野会長がおっしゃったとおり、

日本は極めて社会運動発生率の低い国とされています。例えばISSPという調査ですと、社会運動発生率は、西ヨーロッパが約50パーセント、オセアニア・東側のヨーロッパですと大体20パーセントから30パーセント、南北アメリカでも大体10パーセントから20パーセントくらいはあると言われていて、東アジア、特に日本は何パーセントくらいなのかと言うと、5パーセントくらいです。こういう状況は戦後というか、ここ20年、30年は続いておりまして、つまり社会運動をやりたいがらない人たちの国なわけです。

さらに言えば若年層になればなるほど、といいますか50代以下はかなり社会運動の忌避感が高くなっている。そう考えたときに、その話をメディアでするとすごく引っ掛かるのが、「学生運動のトラウマでしょう」とよく言われるわけです。本当にそうなのか。ドイツでもイタリアでも相当激しい学生運動があった。フランスなんかはいうまでもないわけですが、それでもデモ参加率は、現状まだ50パーセント前後はある。世界価値観調査とかでも30パーセント以上あるわけで、そう考えたときに、そういう「よくある論」で片付けたくないなと思っています。こうした現代史にさかのぼるような研究、68年以降というか、72年以降というか、そういう学生運動が終わった後、その過去がどう語り継がれたか、どう意識されたかという研究を始めたいなと思ったところです。

そういった課題意識から、それまでやってきた若い社会運動家の聞き取りから、現代史的なものを遡るようなテーマになっていったわけです。まず70年代の社会から社会運動が衰退していったときに、何を原因とする議論が多いかというところ、一つは消費社会化が人々の社会運動に対する意識を減退させたみたいな議論は非常によく見られるものです。

2. 先行研究—社会学における1970-80年代認識の「特殊性」

① 人々の個人主義化・私生活中心主義が人々の公共性を衰退させた説

ここからレジュメに入っていくのですが、つまり豊かな社会になったから、これ以上、社会運動をする必要がなくなったのだよ、みたいな言い方は、それこそフランス・フクヤマじゃないですけども、よくある議論として日本でも言われていたりします。

実際、ラジカルな社会運動っていうのは、80年代以降、見られなくなっていて、例えばデモ発生率も一般的には下がっていますし、社会運動への危機感も高まった、これは山本英弘さんのような政治学者がおっしゃられるところです。ただそればかりじゃなくて、制度的な社会運動、むしろ組合の組織率も80年代にピークくらいになるようになってきたと思いますので、より運動が制度的になったというか、交渉型になってきたという言い方のほうがいいのかと思います。実際に非制度的政治参加、いわゆる投票以外の政治参加の中でも「運動」より「依頼・請願」への意識が高まったというような言われ方を政治学者などはしております。

もう一つは、より文化的な要因に原因を求める議論ですけれども、対抗文化が衰退、商業化したみたいな言われ方ですね。つまり、もうちょっと60年代はカウンターカルチャーみたいなものがしっかりあって、それを特に若者が支えるような文化的基盤がしっかりあったのだと。ただ消費社会が高まっていくと、そういった対抗文化もどんどん商業化されていったので、それによって対抗性がなくなっていった、みたいな言われ方ですよね。生活がどんどん消費社会化されていくというか、それまでいわゆる消費財というものには使えればいい、あればいいというものだったのが、例えば単なるトイレットペーパー一つでも香り付きであるとか、2枚に重なっているとか、いろいろ選ぶ選択肢ができてきたという形で、生活そのものをより消費として選択肢の中で選んでいくという意識の強まりがあった。それが消費社会化なわけですけれども、そうすると、どんどんそちら側に意識が引っ張られるというか、結果として資本主義に対抗する気がなくなっちゃいますよね、みたいなのは割と社会学者の人たちが言っています。消費社会化が対抗社会を失わせたという主張になるかと思います。

そういうことを考えると、学生運動以降、社会運動があまり見られなくなっただろうみたいなものは、割と社会学者とか一部の経済史の研究者の中で、経済史というか消費史みたいなものに近いと思うのですが、消費社会みたいなものが一つ重要視されてくる。消費社会化によっていわゆる対抗文化を担っていたような人、社会運動を担っていた人ってというのが消費社会化されちゃったので、それによって政治とか対抗への関心がなくなっていく、みたいな言われ方をするわけですけども、私はそれについてはすごくシンプルだなというか、例えば消費を通じた社会運動は、2020年の私たちだからいえることなのかもしれないですが、結構あるだろうし、それこそアラン・トゥレーヌとかは新しい社会運動っていう形で、そういった運動をもう70年代に定式化・概念化している。

さらに学術的な学説として、社会運動衰退した説っていうのは結構いろいろと出ているので、それについて本格的に先行研究の章で検討していきたいと思います。まず一つ目として、人々の個人主義化・私生活中心主義化が人々の公共性を衰退させた説というものなのですが、これは80年代の論壇などでもよく議論されてきたことだと思うのです。日本人のこの時期の使いやすいサーベイとしては、NHKが5年おきで取っていた日本人の意識調査というものですよ。あとは統計数理研究所が国民性調査を公開していますけれども、それなんかを見てみますと、価値観がこの時期、大きく変わっている。戦後を抜けてというか、戦後が終わってはいないのだけど、ある種、価値観の次元ではページが変わったというか。どう変わったかっていうと、いわゆる手段的価値から即時的価値へ、みたいな言われ方をしています。手段的価値というのは何かっていうと、勤労・節約・効率性・計画性みたいな、長期に計画を立てて、そこにコツコツ頑張ることがい

いのだよっていう価値観から、より即時的、現在中心で情緒的。あるいは余暇志向であったり、私生活優先であったりってところですね。若い世代になればなるほど情緒志向、今楽しければいいみたいな志向になってきたってところですよ。

誤字があって申し訳ないのですが、社会奉仕的人間というタイプの、NHKの日本人の意識って確か四つくらいの間分類をしているのですが、社会奉仕的人間というのが減少したのに対して、私生活人間、社会のためを考えるっていうよりは、私生活を考えるって人間が増えていったみたいな言われ方をしています。これは国民性調査も同様です。みんなで世の中をよくするっていうより、自分がより世の中で名を上げるみたいな意識が高まっていったという時代とされていて、国の繁栄や公共の奉仕より個人の自由を重視する時代へというのは、これは割と日本史研究・政治意識研究でも一貫してみられている時代の意識なのかなというふうに思われます。

では社会運動というか、いわゆる社会改革に関する意識は全くなくなっただけかというと、そんなことはなくて、ただそれが生活保守型になってきたってのが、一つこの時期の行政学者とか政治学者の指摘として大きいものです。住民運動から生じた革新自治体っていうのもいろいろと見られて、福祉政策も浮上してきたのですが、70年代後半になって下火になっていった。いわゆる保守回帰みたいな言われ方をよくするようになって、経済成長と生活保守を政府に期待するようになると、運動もそこに同調するようなものが強調されていったってような言われ方をしていることもあるようです。これが一つ目で、価値観が個人主義化したから公共に訴えかけるような運動がなくなってきたよってのが①になると思うのです。

② 豊かな社会が人々の対向性を衰退させた説

②は前置きでも申し上げたような、社会学者らが議論しているものですがけれども、格差が解消されて誰でも耐久消費財を得られるようになったし、誰でも消費社会の発展を享受できるようになったと。そうなるとう物を持っているということが人並み意識につながるってのが、高度経済成長期を経たオイルショック以後、オイルショック前後の低成長期にできた日本人の意識だということは割と文化史の人たちが指摘している部分です。そういう時代に生まれ育った子ども・若者に関しても、持ち物を持って人並み意識を形成するようになります。そうなれば当然、人々の意識も経済発展、豊かな社会というものを支持するようになりますから、当然ながらいわゆる当時の反資本主義みたいなものをイデオロギーとする社会運動は衰退していきますねというような議論になるという感じですよ。

③ 社会運動・労働組合運動への失望感が社会運動への参加を減少させた説

3番目なのですが、こちらはぜひこの研究会で検討させていただきたいなというところでもあるのですが、①②はどちらかというと学生運動とか、あるいはもっと大きい反資本主義というか、共産主義・社会主義タイプの運動の衰退を嘆くような議論だったわけですが、労働組合運動への意識みたいなものも割と労働運動研究であるとか、政治学者も指摘しているのですが、学生運動の影響力っていうのは大したことなくて、労働組合運動に対する意識が日本人の社会運動に対する意識を規定しているのじゃないかっていう主張です。これは大嶽秀夫先生などが割と指摘しているところなのですが、スト権をめぐる75年の大規模なストが失敗しちゃったっていうのが、運動に簡単に失敗とか言いたくないのですが、難しい意識を生んでしまったのではないかっていう議論ですね。

これはこれで反論したい部分としては、労働争議件数は70年代・80年代ではむしろ上がっていて、いわゆる運動華やかなりし時代として指摘されていた60年代よりは労働争議件数は多いわけですよ。労働者の組織は、これ私が言うより本日いらっしゃる先生方のほうがお詳しいと思うのですが、最も組織化されているのは80年代なので、そういった意味でこの③の仮説は、もしかしたらデータの時点で棄却しちゃってもいいのかもしれないなと思っています。ただ労組の対抗性は薄くなったよというのを、特に渡辺治先生とかは割と一貫して主張されてらっしゃる。労使協調型みたいなところが、対抗性、つまり社会から運動の対抗性、人々の対抗性を奪ったのではないかと、みたいな言い方をしている論者もいる。

もう一つが失望感っていうつながりで言うと、学生運動への失望感みたいなところを指摘している研究者もいて、これは伊藤公雄先生、海外の日本学者とかも、結構、この指摘をしています。学生運動、特に新左翼運動の過激化っていうのはメディアを通してもそうだけでも、非常に日本人に対して大きい影響を与えたのだ、という議論が「社会運動がっかり仮説」というか、社会運動への失望感仮説として挙げている人もいます。そういった意識がメディアとかで引き継がれているから、いわゆる正しさを押し付けるようなタイプの社会運動に対する忌避感とつながっているんだというのが、他の社会学者の方、北田暁大先生であるとか、山本昭宏先生の主張に近いのかなというふうに思います。

④知識人、エリート層が変容し、対抗性を失った説は、書いてはみたのですが、あんまり重要ではないので、こういう議論がお好きな方がいればと思いますが、今回の研究会の趣旨とは少し違うと思いますので省略させていただきたいと思います。次の⑤1968－1973年の「激突の時代」「政治の季節」を特別視し、のちの「シラケ」を強調する視

点が事後的に生じた説ですが、これはある歴史学の研究会で検討してみたらどうかと言われて、それは興味深いなと思ったんですが、そもそも私たちは68年から73年のいわゆる学生運動・全共闘運動であるとか、新左翼運動っていうのを歴史が積み重なる中で、むしろ特別視してしまったのではないかという議論です。

つまり歴史におけるある一部分をあまりに強調してしまったから、その後の落差として社会運動しだけ国家日本みたいな言説っていうのが出てきたのではないかというのが仮説⑤ですが、ただこれも変わった仮説ですので、あくまで紹介という形にさせていただきます。

3. 分析枠組と分析対象

3-1 世代間差異への着目

この1・2・3・4・5を今まで社会運動の文化研究やってきたわけですけども、どのように検証するかといったときに、社会運動の社会意識みたいなものの移り変わりを雑誌というか、当時のメディアから検証できないかを中心に考えました。先ほどの議論で検討されている変数を集約すると、要は1970年代の日本人において公共性・対抗性が薄れて個人主義になって、消費社会の担い手化して、私生活中心主義になったから社会運動やる気が薄れたのだよ、みたいな社会意識原因説になるわけですけども。その社会意識ってどこに谷間があるのかっていうと、これは社会学者の太郎丸博先生であるとか、あるいは日本人の調査を分析したような見田宗介先生のグループが結構やられているのです。この点における社会意識の差異は、いわゆる団塊世代以前の人たちと戦後世代・戦中世代、団塊世代と一部かぶるのですが、以前の人たちと1954年以降の新人類世代の以後で最も大きい谷間を描いていると。本当に平べったく言っちゃえば、団塊世代以前の人たちはまだ対抗性が高く、集団主義的で消費社会に対してもまだまだ危機感を持っていた人たちなのだけども、新人類世代からは公共性・対抗性というよりは、どっちかっていうと個人の利益であったりとか、あるいは消費社会に対して親和的な性質であるとか、私生活中心の社会志向を持っているというふうなデータが出ていたと。

これはNHKや放送文化研究所の2004年の社会学者が集まって書いた本がすごく面白いのですが、そういった意味でこの二者の世代間格差みたいなものについてメディアを通じて検討できないかを考えました。さらに言えば、この下世代が、新人類世代以降の人たちが社会運動・労働組合運動をどう見ているのかを当時のメディアを使って、70年代・80年代のメディアを使って論じられれば面白いなというふうに、私のやってきたメディアの研究と少しこじつけ的なところもありますけれども、そうやってデータを分析してきました。

今回検討するデータは1975年・1985年、いわゆる社会運動が衰退したとされる低成長期、労働組合運動はまだまだというか、ここからが元気ですけれども、低成長期に社会運動・労働組合運動が、その当時の若者、新人類世代によってどう見られたかというのを当時刊行された若者雑誌を検討することで明らかにしていきます。でも若者雑誌、当時、本当にいろいろで、例えばイラストを投稿するものとか見ても仕方ないですから、当時の若者たちの生活に即したような投稿を書く読者投稿雑誌を対象とします。ただ生活に即した投稿っていても、内容や形容はさまざまで、当時の若者投稿雑誌って、それこそ『オールナイトニッポン』ですとか『パッケインミュージック』のような深夜ラジオ的な性格を持っているものも結構ある。つまり彼らが日常で出会ったものをどう投稿するか。それこそ真面目にボランティア・社会運動をやってみたいという投稿もあれば、社会運動・労働組合運動をちやかしたような投稿もあれば、あるいはもう少し批評的に見るような投稿もあるわけで、彼らが日常で出会った社会運動・労働組合運動を、どう書かれたかを検討するっていう形にすれば、恐らく下世代、まだ労働する年齢にきていないような新人類世代たちが大きく意識が異なるとされる上の団塊世代のやっている運動をどう見たかについて論じられるのではないかなと考えて検討していったところではあります。

3-2 対象としての雑誌『ビックリハウス』

今回、採用したのが『ビックリハウス』っていう雑誌で、私もこの研究を5年ぐらいやっているのですが、75年から85年に刊行された月刊誌といわれています。読者は当時の雑誌を論じる上でかつ重要な点で、読者が若者の男女半々であるっていうところが興味深いなというふうに思いました。いわゆる『an-an』とか『non-no』みたいな女性向け雑誌でもなく、かつ『POPEYE』のような男性向け雑誌でもなく、かつ投稿を通じた生活実感みたいなものが見られるというところが重要なのかなと考えておりまして、75年から85年まで、いわゆる毎年18歳ぐらいが読者の平均年齢になっているというアンケートデータが出ています。読者投稿が大半を占める点が若者の生活を通じた運動に対する目線を見る上で重要だと思ったのでこちらにしたというのと、全国各地に流通されていることですね。

興味深い点として、結構、全共闘世代で実際、学生運動に関わったような人たちが編集者をやっているというところなんです。主には、特に重要なのが法政大学で中核派に関わった糸井重里さんとか確か4回逮捕されていたと思うのですが、今でも有名でいらっしゃいますけれども。あと有名な方ですと日比野克彦さん、芸大の学長の方で学生運動のときはもうちょっとアートを通じたような運動みたいなことをされていたと思います。

あとは多摩美術大学の萩原朔美さんも、アングラートを通じて活動されていたような方かと思います。

こういった方たちは60年代に運動をして、70年代前半にやめて、70年代後半にコピーライターやアーティスト等になって、この雑誌に関わった後、美術系大学の教員になっていたり、あるいはテレビ番組とかメディアで活躍されるという経緯をたどられたかと思います。消費社会というのが概念的なものなので、彼らの実務にどれぐらい関わっているかは分かりませんが、渋谷パルコ等を中心とした広告文化とも親和性の高い雑誌でありました。70年代までの対抗文化とその消費社会化みたいなもの、パルコというのが非常に懐の広いカウンターカルチャーをも包摂するような現代文化観を持っていたわけですけども、そういう意味でも非常に興味深い文化的背景を持った雑誌かなというふうに思われます。

ただ雑誌は対抗性が逆でないという点が、また彼らの転向というか、複雑な過去の運動に対する感覚がある。一筋縄ではいかないような対象で、だから研究に取り組んでいるところがあるかと思います。編集者自体は、どちらかといえば団塊世代の人たちが多く運動経験を持っているのに対して、読者が新人類世代、今回も多くは読者のデータを分析しているわけですけども、また意識の差異みたいなところがあって興味深い。

先ほども申し上げましたとおり、素直にこの日こういうことがありました、みたいな朝日新聞とかの投書欄をイメージされるよりは、もう少し若者同士で日々の実感を笑い合う・話し合う、あるいは日々起こったことをいじり合うような、どちらかという「面白空間」みたいなところに近いようなところがあります。そういった雑誌の癖も踏まえた上で、ここに出てくる社会運動なり労働組合運動の話というのを見ていただければいいのかなというふうに思われます。どちらかという部数が多いからこれを研究しましたというよりは、いろいろな側面からこの媒体が興味深く、かつ社会運動とか政治に対する当時の複雑な感覚っていうのをつかむ上で重要なのかなと思ったから採用したというところがあるかなと思います。

4. 事例分析：「新人類」から見た社会運動と労働組合運動

いわゆる新人類世代に属する若者たちというのは、どういった形で年長者たちの社会運動を記述して、それを形容したのか。データのバックグラウンドについて書いてない部分を説明させていただくと、全部雑誌を文字起こししているのです。写真とかの部分はさすがに文字起こしができないので画像データとして持っています。だからテキストデータとしての分析が可能なのですが、どういう形で社会運動とか労働運動を捕捉するかっていうのが結構難しい。例えば過去の論文とかでは、ウーマンリブとかについて検索したりもし

ていますし、あるいは政党名とかでも検索して社会運動とかそれに関連する主題を分析していたりするのですけれども、今回もうちょっとシンプルに、まだ企業等で労働していないような若者たちがどういう場面で社会運動・労働組合運動を見るかっていうとき、街頭でのデモンストレーションが多いのかなと思ってデモにしたり、あるいは労働組合運動としてストあるいは予備的に組合みたいなものを検索しているのですが、もし検索ワードについてこういうのも当時だったら引っ掛かるんじゃない、みたいなものを教えていただければありがたいかなと思います。

75年から83年までのデータを検討したところ、ストとかデモはそんなにももちろん多くないんです。ただ、これはデモとかストが彼らにとって身近じゃないから多くないというよりは、結構、多様なことを書いている雑多な内容の雑誌というのもありますし、例えばテレビの南沙織ちゃんがかわいいみたいな話であるとか、あるいはもうちょっとガチで当時の内閣総理大臣、誰になるのだろうみたいな話もあったりするので、語のばらつき、話題のばらつきがかなり大きい。そういう意味で抽出語として、超過小ではない、話題としてそこそこに出ている方だということも踏まえていければなと思います。したがって、数の部分に関しては、今回はあまり気にしないでいただいて大丈夫です。

これは85年までの雑誌なのですが、83年までのフル文字起こしが終わっておりますので、75年の創刊号から83年の12月号までの雑誌を全テキスト化し、ワードで検索しました。ただストというときに、テストとかストレートパーマみたいなものも入っちゃいますので、そういったものは文脈から関連しないと判断して、このくらいの数ですから手作業で除けます。

若者たちはこういう雑誌で社会運動をいつ見て、どういう形で言及しているのかというと、まず一つ見られたのは、実際に日常生活の中で見たストなどの活動について記述するタイプの行動です。これは75年にもものすごく多くて、交通機関のストがあったっていうことで学校が何日間も休みになったとか、あるイベントが休止になったとか、そういった日常の風景の中でストが出てくる。今、深夜ラジオ番組とかでストでこうなったみたいな投稿があるとはとても思えないので、そういう意味では労働していない若者の日常に対しても影響を与えるし、消費者としての若者の日常風景にもインパクトがあったのかなと思います。これはいつでも若い人の感性を考えれば当たり前のことですが、応援しているとか理念に賛同しているというよりは、さらっと自分の日常にこういう影響があったよっていう記述ですよ。ただもう一つ自分と関係のある労働者との関係があると、少しそこに対する評価も異なってくるっていうのが興味深いところでした。

例えば読者層が中学生から大学生なので、学校みたいな場、大学みたいな場でストライキを見るっていうことは彼らの言及には数多く見られた。その風景については単純に鉄道

が止まったっていうよりは、もうちょっと彼らについて何かを残す。例えば「先生が用事があるからと言って授業の途中で帰ったが実はストをやっていた」というネタ。これ、「ピックラゲーション」という、自分たちが日常の中でびっくりしたことを書くコーナーなのですけれども、それってすごく彼らにとって驚くべきことであるわけですね。もう一つも糸井重里さんの『ヘンタイよいこ新聞』っていうコーナーなのですけれども、組合派の先生たちが輪になってお話をし、「えいえいおー」と言っている姿に意外性があるみたいな、そういった投稿もあったりしました。

労働者としての教員がストをやったり、あるいは組合活動をしたりする一面っていうのが、びっくりしたり、意外っていうのは割とよく投稿されていたり、記述されていたりする。そういった投稿は割とこの雑誌にとっては、あるいは当時の深夜ラジオにとってはパターン化されていて、そういう教員としての典型的な姿を破るような語りとか、行動の一つとしてストが使われているのはすごく興味深かった。皆さんにとってそうじゃないとは思いますが、私は結構面白いなと思いました。

例えば父親の組合活動とかも出てくると思ったのですが、これ結論の部分で少し話しますが、結論としていえば全然出てこないのですね。彼らが日頃接する労働者って教員というか、自分の消費・生活の場に出てくる労働者。この雑誌は編集者が団塊世代以上の人たち、編集者・寄稿者、いわゆる読者投稿ではなくて、より上の世代で雑誌に、プロの書き手が寄稿する場合がありますけども、こういった編集者・寄稿者が過去の日常の風景としてストライキに言及しているっていうことがあります。要は回顧録とか実体験の中でストライキ・スト・労働組合が出現するっていうことですね。そういった場合の議論は、社会運動なども同じような語られ方をしているのですけれども興味深い。例えば声優の方のインタビューなんかで、役者単独のストをテレビの黎明期はやったりしたっていう話が出てきたり、あるいは東大医学部出身の先生の連載があったりするのですが、東大の医学部でストなんかをやって、みんなが地方の大学に散り散りになったよ、みたいな昔話もある。

また、タレントさんが、こういったストライキがうちの事務所であったみたいなことを言っているのですが、このような過去語りとして読者である若い人たちがストとかデモとかを享受していくっていうのは、この雑誌あるいは同時期の芸能誌とかでもよく見られるところで、私としては大変、興味深かったです。武田鉄矢さんも昔よくデモの光景を見ましたね、みたいな感じで記述している。もちろんこの雑誌が発行されているときも当然ストライキとかデモとかあるのですけれども、なぜか過去として語られる学生運動・労働運動みたいなものの語られ方っていうのは、本誌の分析でよく見られたように思います。ただどちらかというと、過去語りとしての側面は、労働運動より社会運動の方がより強かつ

たという感じがします。恐らくストライキが75年から85年においてもそれなりに日常的な行為で、あえて過去語りの対象にするほど特別なことではなかったのかなというところはある得ると思われまます。

三つ目、ストライキあるいは学生運動を、ある種、言葉遊びの対象として使う、材料として使うようなことは、いろいろありました。大した話じゃないし、何でも言葉遊びの材料としては使われるわけですけども、彼らが大人の世界のストライキを言葉遊びの対象としているということ、子どもですらストライキが何かということを知っているというのは、ストライキを子ども時代知らなかった私としてはすごく新鮮だなという感じはしています。言葉当てはめみたいな、たわいもないゴロ遊びが多いのですけれども、彼らの生活世界における労働運動観が出ている。

読者の中心層である当時10代、20代初めの若者にとっては、他産業より鉄道のストライキの影響がものすごく大きいし、公共性であり彼らの生活に対する影響が強いところがあるのかなというふうに思います。実際、他産業でもかなりストライキというのがおこなわれている。ただ当時ストライキといえば彼ら若者たちにとってではなく、社会全体にとっても鉄道会社のストライキの盛り上りが大きかったのか、一般市民レベルでストライキといったときに、どの産業を当時イメージされることが多かったのかということは、ぜひ連合・連合総研の皆さんにお伺いしたいなというところもあって、こういったセンテンスを挟ませていただきました。

もう1点、題材としてストライキとか労働組合とか社会運動とか組合運動っていうのが使われているのがすごく興味深かった部分があります。ある種、現実的には特に社会運動というのは、この時期かなり下火になっている。デモの発生率が75年から85年の間にガタ落ちしているのですが、それにもかかわらず結構創作のモチーフとして使われているのは興味深かった。何か劇的なイベントであったり、対立構造が明示的で経営者対労働者というか、権力対市民みたいな対立構造が明示的で、若い人としてもお話が作りやすいところがあったのかどうかは分かりませんが、例えばショートショート賞の題材というか、ある種のモチーフとして労働組合運動とか、ストみたいなもの、あるいは学生運動みたいなものが使われていたりします。

こういった内容なので、この未来塾でコメントしづらい方のほうが多いかと思うのですが、考察をさせていただくと、75年・85年の学生・生徒にとって、ストライキ・労働組合あるいは社会運動の存在っていうのは、日常的には特に公共空間において目にする行動としてあったのだろうな、あるいは、より年長者である編集者とか寄稿者がかつて従事した行動として、創作の中の出来事として認識されていたのだろうなというのがあるのかなというふうに思います。特に日常的に目にする労働組合運動は、鉄道のストライキあるいは

教員の組合活動になるのが特に興味深い点でした。

先ほど言及したように、例えば時代的には75年で専業主婦率ピークになりますから、母親が働いているというより、父親が正社員として働いているという男性稼ぎ手モデルのほうが全然強い時代なわけですけど、ただ父親をはじめとする家族の組合活動とか、ストライキの話っていうのは投稿されてもよさそうだとは思ったのですが、ただその存在がない。さらに言えば労働者としての父親像みたいなものが多くなくて、せいぜいお父さんが家でオナラしたみたいな話くらいしかないのですよ。それはすごく興味深かったです。つまり労働者としての父親像が見えないというのは、家族社会学者が議論していきまして、家族がこの時代ものすごく消費社会化によって、あるいは企業社会化によって家庭が個人化されていくということを議論しているのです。これは岩田正美さんとか木本喜美子先生とかですけれども、高度経済成長期から安定成長期にかけて、サラリーマンがかなり長時間労働化したと。父親が家庭内においていない存在なのが当たり前になったと。かつこの時代に受験競争というか、かなり教育熱が上がってきて、子どもの塾通いもかなり見られるようになる。そう考えたときに家族が個人化して、かつ耐久消費財が普及して家族ばらばらの食事、家族ばらばらの時間っていうのが実現するようになる。そう考えると家族が個人化する中で、ある種、労働者としての最も身近である父親像っていうのが不可視化されていったことと関連があるのかなというふうに思われます。

例えば今のZ世代みたいな割と意識の高いような人たちは別として、例えばうちの学生とかにデモを見たことがあるか、ストを見たことがあるかって言ったら、あんまり見てないと思うのですよ。せいぜい京都の中心部でちょっと見たことがあるくらいですが、主張は恐らく詳しくは分からないと思うのです。ただ頻繁に目にする機会があれば、その行動内容についてある程度、趣旨の理解はするわけですから、例えばストライキを用いた言葉遊びとか創作なんていうのは、そもそもストライキの意味を知らなければできないわけで、そういった意味での社会運動への理解というのは、まだまだ恐らくあった時代だったのだらうなっていう感覚を持っています。この点を今の社会の研究者としては非常に新鮮に感じました。

もう一つ私の過去の研究は、女性運動に対するからかいというか、75年・85年の女性運動へのバッシングを『ビックリハウス』という同じ雑誌を通じて見たものと社会運動に対する意識を見たものなのですが、いわゆる労働運動・労働組合運動に対する冷笑的な意見とか、攻撃的な意見っていうのは極めて少ないというか、ほぼない。この差異はかなり社会運動研究的には重要なのかなと思います。つまり、この『ビックリハウス』にせよ、あるいは先行研究が検討した他の若者雑誌・女性雑誌・男性向け雑誌・新聞にせよ、ウーマンリブとかはめっちゃめっちゃ叩く。学生運動にしても失敗した、終わった、過激だった、み

たいなことをテレビにせよ、メディアにせよ言う。環境運動に対しては、意識高いねって
いうか、生協運動に関しても恵まれた主婦がやっているみたいな言い方をするわけですが
ど、労働運動に対しては、そういう冷笑的な声とか攻撃的な声とかって一貫してないって
いうのは、すごく興味深い点だと思います。

5. 考察と結論

つまり75年から85年の若者について先行研究まで検討すると、広義の日本人において、
労働運動とその他の社会運動に対する理解や寛容性にかなり温度差があった点は注意して
見なくてはならない。つまり単純に公共性とか対抗性が衰退したら、運動全般への無理解
が進むはずなのです。でも実際はそうじゃなくて、ウーマンリブとか学生運動に対しては
無理解が進むわけですが、労働運動に対しては大して進んでないっていうのは、最初
挙げたような先行研究の仮説を裏切る結果が今、出ている。

それに関しては、当然ながら労働運動が他の人権系の運動・環境系の運動より生活に直
結していますので、多くの人たちの支持を得やすいついていうこともあります。当時起こっ
た社会意識の変遷、つまり個人主義化とか、消費社会の担い手化とか、私生活中心主義化、
私生活化と労働組合運動の掲げてきた課題は、他の社会運動よりは親和性が非常に高い。
そういう社会意識の変動にも耐え得るというのか、寄り添えるようなイシューづくりを意
識的にしていたのかは分かりませんが、このような点は社会運動の研究者として、労働運
動と他の社会運動の分かれ道としての70年代・80年代だったのかと考えています。

ぜひいろんな観点からご示唆をいただければと思っております。

これで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。当時の時代認識として、
私の認識のずれなんかも指摘していただきたいので、ぜひよろしくお願いします。

質 疑

【塾生G】

気になっているところが3点ありますが、この後の社会学研究者の塾生からのコメントもあると思いますので、差し当たり1点だけ質問させていただきたいです。一番、最後のページで指摘されている最後の4行の部分が少し理解できないところがありまして、先生の仮説としては最後の4行で示されているように、個人主義化っていう当時主流とされた価値観、労働組合運動が掲げている課題も、その間に大きな齟齬はなかったということが仮説として示されているという気がします。この点、本当に齟齬がなかったと言えるのかと引っ掛かっています。恐らく個人主義っていうのを突き詰めていって、その突き詰めた個人主義から考えると労働組合はどうしても集団とか数の論理で要求を貫徹しようとする。自分たちの要求を貫徹するために、時には組織の共生みたいな形で、集団の利益を実現するためには、労働組合に入りなさいというような圧力をかけてくるようなことだってあるかもしれない。そう考えると、個人主義と労働組合が前提としている集団性というものは、ある意味、対極的な位置付けとして捉えざるを得ないところがある、という気がするのですが、そこの部分の齟齬がなかったということを、どのように立証できるのかというのが気になります。

【富永准教授】

この部分は、社会学者的バイアスが入っているかもしれません。この個人主義化・消費主義化・私生活化はセットで論じている人が多くて、当時の社会学者の主張は、個人の生活が豊かになりさえすればいいみたいな意味での個人主義化だと思うのです。そう考えたとき、労働組合って基本的には生活を豊かにしてくれるので、その点では彼らと意識は一致している。たとえ集団主義を強制されても、俺の生活が豊かになるならいいじゃないかという感覚で労働組合の集団主義を受け入れるということは充分あり得る。ただこの「豊かになりさえすればいいじゃないか」派の人たちというのは、社会運動に対しては冷ややかというか、社会運動が女性運動や環境運動の目的に進んでも、彼らの生活は豊かにならないので、社会運動や労働組合運動には、彼らのメリットを織り込みやすいという感覚があるのかなというところですよ。

【塾生G】

ありがとうございます。私の「個人主義」という言葉の捉え方が少し違っていたかもしれません。

【富永准教授】

この部分はパッケージ化して論じられることが多く、私もパッケージ化して考えてしまっていたのかもしれませんが。ご指摘ありがとうございます。

【塾生 F】

大学で憲法を研究しているのですが、趣味的に同人誌なんかをやっていて、去年それこそ大江健三郎の『河馬に噛まれる』だとか、連合赤軍の話とかに関心を持って読んでいたりして、この70年代の話を興味深く聞かせていただきました。ポストモダンに関心を持っている学生は、だんだん少なくなっていると思うのですが、自分に関心を持っていて、ニューアカの話とか、山口昌男とかにも関心を持っていたのですが、この当時の『ビックリハウス』という雑誌はあまり知りませんでした。読者の交流のある雑誌みたいなものが、今と違ってそんなにかないのかなと思っていました。メディアの性質と日常と政治との関わりがあるみたいなことが関連するのかなというのが気になったところで、今だこういうストとかが雑誌の中に出てくることは、ポップな感じの雑誌ではほとんどないのかなと思うのですが、現在と70年代のメディアと比較し、取り上げられる話題の変化は、連動していると考えられるのでしょうか。

【富永准教授】

そうですね、実はこの『ビックリハウス』に研究対象を定める前、ずっとTBSラジオ番組の『パックインミュージック』っていう深夜ラジオ番組（『オールナイトニッポン』みたいなものだと思っていただいていた方がいいと思うのですが）を聞いていて、学生運動ネタであるとか、あるいは部落の話であるとか、あと在日外国人に関する運動の話とかが出てきていたのです。そういう意味で、私からするとそこがすごく興味深いというか、若者文化が政治みたいなものに対して議論することを「しらけ」と言われていた当時すら、まだこんなに残っているのだからということが、この研究の端緒としてあったかと思います。それがなぜ政治について語ることさえ、こんなにびくびくする若者文化が今生まれているのかということとは問題意識としてあると思いますね。

【塾生 F】

「しらけ」とくくるというよりも、最近の芸人さんとかのラジオ聴いていると、ちょっと前の野党を風刺したようなノリとか、たまに政治が話題になるっていうか、それをいじるような場面では出てくるのかなと思うのですが、そもそも生活の中でそういうストとかを見ることがなかったから、生活の中で目にした政治の情報っていうものがそれしかな

いから、結局そういうふうに表示しているにすぎないのかなという印象をもっています。

【富永准教授】

そうですね。これ山本英弘さんと西城戸誠さんという方が、法政大学人間環境論集に載せている論文の中で、70年代から90年代くらいまでの東京でのデモ発生率なんかを見ているけれど、がた落ちするのですよね。私もそれを追いかけてラジカルなデモの発生率とデモ中の逮捕者の発生率を見たのですが、すごく減っています。それを考えると、社会運動が署名活動とかシンポジウムの方向に行ったという可能性はあるのですが、いずれにせよ街頭で行われる運動から不可視化され、見えなくなってしまいます。

【塾生S】

もともと社会学をやっております、富永さんの研究室の後輩に当たります。特に今回の分析の中で出てくるところもそうだと思いますし、やはりデモやストの経験が語られることをどう捉えたらいいのかということが非常に重要なポイントだなと思っています。特に自分の身近な体験の中で行われている現象に対する言及はあるが、もっと身近な事例になってくると、自分の身近な存在である誰かがそれについて語ったことというのが出てくるわけで、後者のケースが結構重要なかなと思っているんです。つまり後者のケースにおいて、なぜそういう身近な人たちの中でデモやストが語られたのかっていうのが非常に重要なポイントだと思ひまして、少なくともデモやストの経験を何らかの形で語っているわけで、少なくともこの流れの中で見る限り、それは自分にとっての恥ずかしくて秘密にしたような話というような表現というよりは、むしろ自分はこういうスペシャルな経験ができたのだという、ある種プレミアムな経験としての語りというのがかなり見られるのかと思います。どちらなのかによって案配が変わるなというふうに思っています。デモに参加した経験、当事者であったことがプレミアムなことだっていうふうに語られるというのは、まさにオンゴーイングでその現場に接している場合は、少なくともその当時の時代背景の中では、そういうような語りができる、そういった正当性はないわけです。つまり、そういったものの件数が多くてもそれが大きな結果に結び付いてないし、それ自体が縮小しているという時代背景が仮にあるとすれば、それについて正当性をもって語ることはやはり難しくなる。でもそれを語れる人はどういう人なのかというと、そういったものから自分は離脱したのだという、相対化した経験として語られるわけです。そういうものを勲章として掲げている人を見ることを、さらに相対化するような、相対化の相対化みたいな現象が起こっていて、それが冷笑的なまなざしにつながっているのかなというふうに感じました。

つまり冷笑化のポイントというのは、現象的なデモとかストの経験というよりは、むしろそれを勲章のように語るかつてのデモ参加者たちのその認識というものが、結構大きかったのではないかと。それ故にそれを相対化するような、パロディー化するような流れというものが正当性を持つような話になるのかなというふうに思いました。そこまで含めて考えると、これらの話についてもう一段、時代背景を踏まえた分析になるのかなというふうに感じておりました。

【富永准教授】

ありがとうございます。私の書いた2020年の論文では、「俺たち学生運動やって恥ずかしかつたよね」みたいな語りが多く見られたことを分析しています。それは、急いで経験を相対化している人たちというか、何がなんでも過去化したいというか、今でいう黒歴史みたいなところとして見ている。まさに相対化をどう捉えるかという視点の話かと思います。武勇伝的に語られた語りとしては、この雑誌でいうと戦争経験が割とそうなのです。戦争経験に対する語りって、これは多分、他の戦争社会学とかの研究でもそうですけど、70年代にはあまり見られない。リアル過ぎるし、生々し過ぎて、なかなか語れないと。この雑誌なんかでもそうで、80年代になって結構増えてくる。しかもおじいちゃんとかの、ちょっと戦争中ふざけた話みたいなのを聞いた孫の投稿とかが出てくるのですね。そういう意味で相対化するまでの時間、つまり2、3年前にあった学生運動は簡単に相対化するのに、20年、30年前の戦争の経験は、そんな簡単に相対化できない、逆に言うと、戦争の経験が20年、30年で相対化できないというのは、そうだと思うのです。かなり暴力的というか、それこそ墓場まで持っていく話は、山ほどあったでしょうから。

それに対して、なぜ学生運動がそんなに相対化が簡単にできるかというのと、多分、失敗という社会的評価を彼らが鵜呑みにしてしまったからです。この雑誌に関わった人たちが、そんなに簡単に相対化できたのかというのは、確かに議論する一つのポイントかと思います。もう一つデモとストライキについてですが、デモのほうがどんどん過去化して語られるわけですね。「はい終わった、はい黒歴史、はい終了」みたいな。それに対してストライキってというのは、例えば俳優の方のストライキの話なんかが出てくるのですが、地に足がついているというか、使用者との関係でこういうふうにして戦ったんだよ、みたいな話で、学生運動の劇的さとはちょっと違う。もうちょっと実績というか、業界をよくしようと思ってやったのだ、うまく言えないのですけれども、確かにその過去化・相対化という視点は重要なかなと思います。

【塾生S】

今の話に付け加えになるのですが、どの母体がそれを組織化しているのか。その母体の存続する期間であったり、プレゼンスみたいなものも相当、影響してそうだなというふうに考えます。例えばデモをやる時とストをやるってときの違いとして、ストの場合は労働組合とか、仮に何らかの失敗と結果をもたらしたとしても、だからといって組合がなくなるっていうことはないです。要するに、それを支えていた組織、例えば学生運動みたいなものが盛り上がりつつも、68年以降、急速に解体していく中で、それを守秘化するような組織が残っていなければ、その語りってのは外に流れていくっていうふうに考えると、そういう視点で分析しても、ある程度、整合性あることは言えるかなと思います。

【富永准教授】

面白いですね。それで連想したのが、安保法制抗議行動に関わった、いわゆるSEALDsというネットワークの若い人たちと話した時に、2015年に絶対に止めるって言って止められなかったことがすごくショックだったと。ただそれって「運動あるある」でもある。運動って多くは失敗するので彼らは今も多分どこかでその失敗を引きずっているというか、自分たちの運動って失敗で、それは重いことなのだと感じているかもしれません。しかし、組織が持続していたり、長く続いている組織が母体だったら、ちょっと違う過去の認識の転換の仕方ってあり得たでしょう、という気はする。そういう意味でワールド・ピース・ナウとか大きいNGOとかだったら、長く続いている一つの試みで、あれはあれで絶対に止められなかったけれども、次に止める機会の何か礎になったかもしれないね、という意味での組織の認識はあり得る。それはすごく社会運動論的な話でもあるなと思います。ありがとうございます。

【事務局】

以前に内閣府で世論調査とかしたのですがけれども、社会意識に関する世論調査と国民生活世論調査で、まさに愚直に聞いていまして、例えば社会意識に関する世論調査だと、昭和46年からずっと聞いていて、個人の思考はあまり変わらなくて、社会運動参加率は下がったという結果があります。コロナの前までは調査員による訪問面接だったので、コロナになっちゃって調査員が行って、唾飛ばして聞くわけにいかないので一時中断して、今、郵送による調査に変わっています。その結果はそんなに変わってなかったんです。回収率も60%ぐらいで低くないと思います。役所なので愚直に聞いています。国民生活に関する世論調査は、有名なのは、「あなたは中流ですか」という、質問です。昭和39年から聞いてますので、他にもいろいろな調査があります。

【富永准教授】

ありがとうございます。こういったデータのサポートはいくらあってもありがたいので。

【事務局】

私、理科系だったのです。英数工学科とかいうので、データサイエンスとか教えていたりしたのです。『ビックリハウス』のデータベースすごいですね。これだけデータあるならコサイン類似度とかやられたことありますか。実は複数の文書でコサイン類似度っていう、要するに単語のベクトルを作って、計算して大きさをやると、マイナス1から1になって、似ているページと全然違うとマイナス1とか、明らかになる部分もあります。ちなみにこれChatGPTで複数の文章のコサイン類似度を相互に計算するパイソンのコードを書いてくださいとやってみたものです。アールじゃなくてパイソンで、取りあえず。パイソンはサポートしていましたので、これがそれで生成させたやつで、これがそのコサイン類似度の鍵なのですけど。

【事務局】

分析対象の世代としての感想をというご指名でしたので。私は1960年生まれでいわゆる新人類なのですが、自分たちの世代が分析されるのは、気持ちが悪いものだなと今日は聞いていました。新人類としての高校大学時代のこの時代の実感についてお話しします。私の高校は結構過激な高校で、高校の生徒会室なんかゲバ棒とかヘルメットが常備されていて、校長の校則に関する締め付けに対して生徒会として意見書とか提出したり、デモやったり、校長室を取り囲んだりもしました。会社に入り、労働組合はありましたが、労使協調のブルジョア的な労働組合には興味がなかったのですが、偶然、労働組合の役員をすることになってしまい労働運動から抜けられずに今に至ります。

ここからが質問ですが、「デモ」「スト」「労働組合」という言葉で分析していますが、ストライキとデモとは異質、違うものだっていうイメージが自分の中ではあって、ストライキっていうのは組合が、最近ではそごう・西武百貨店労組でやっていますけど、組織のバックボーンがあってやるんだけど、デモンストレーション、デモは組合だけでやるわけではないので、ストとデモは、異質なものであって、同質では語れないのではないと思いました。デモは個人で参加するかもしれないけど、ストは組合の運動に賛同しなければ参加しないので、違うものだという感じがして、ストとデモのバックボーンの違いに留意しつつ分析する必要があるかと思います。

【富永准教授】 _____

そのこともおっしゃる通りだと思います。ただ、一般の人が運動を見るときに、最も一般的な用語で形容するとしたら、多分ストとデモくらいしかあり得ないと思うのです。そういう意味で何か当時の人たちが、運動という対象を見るときに使う言葉って何になりますかね。ウーマンリブとかリブで結構出てくるので、そういうイシューというか、政治課題のほうで検索するっていうやり方はあり得るのかなと思ったりしますが、言葉って難しいですね。

【事務局】 _____

ストライキは1950年から60年代に近江絹糸や三井三池炭鉱など繊維や炭鉱のストが中心であり、その後1975年くらいはすでに国鉄のストライキも下火という感じがします。ストライキというワードは「春闘」などに絡めて今も昔も、運動を見るために必要なワードと考えられます。

【富永准教授】 _____

「春闘」は、たまにストとかデモとか調べたときに春闘も出る感じもするので、メーカーとかもあり得るでしょうし。そうですね、ありがとうございます。灯台下暗しという感じで恥ずかしいです。

【塾生K】 _____

今日の話をととても興味深く聞きました、韓国人という立場からすごく勉強になりましたし、韓国人というか外国人という観点からすると、日本の社会運動の特徴とか、きょうのお話にもつながるかもしれないのですが、政治とのつながりとか、社会正義、ソーシャル・ジャスティスということを語られなかったかなと思います。そこが今、先生が研究している70年代後半っていうのですか。70年代から現れ今に続くということにつながるのかなのですかね。例えば世代が違ったりとか、韓国も例えば若い世代で前の世代と一緒に、おじさんたちとなんか一緒にしたくないとは思いますが、でもそれによって社会が変わったりとか、そのために政治を変えたほうがいいのかっていうような動きで変えようとする動きがまだ残っているというか、一部の文脈としてはまだ機能している。これは世代が変わることで自動的になくなるものじゃないと思います。

例えば、2008年ころの若者たちが金融資本主義というような問題について指摘した動きでもあります。だからストのやり方とか、デモのやり方は、多分、上の世代からいろいろ伝わることはできるのですが、そういった政治に参加するとか、社会正義を語るというよ

うな意味としては、ある意味フレーミングを大きなものとして大きな人を動員できるというような感覚は、他の国でも、スペインとかも多分そういう流れで動きがあるとは思いますが。私が一番日本で不思議だなと思うのは、そこがある意味シャットダウンされて個人で終わってしまうことについてどのように理解すればいいのか私も思い悩みます。先生のご意見、例えばいつからそうなのかについては、いろいろな説があるということは分かるのですが、私はそれがなぜいまだに続くのかが一番疑問です。その辺りの先生のご意見をいただければなと思います。

【富永准教授】

ありがとうございます。ソーシャル・ジャスティスっていうことを語らないっていうのは本当にそうだなという印象を受けています。学生たちがこの雑誌の差別言説とかマイノリティー言説で検討してくれたときに、結構ある話だなって思ったのが、たまに障害者の投稿者の方とか在日の投稿者の方がいらっしゃるのですよね。そういう投稿ってすごく優しく受け入れられるのですが、構造的な差別にまで言及しないのです。つまり、いろんな人がいて世界いい、みたいな多文化共生っていうか、いわゆるふんわりした個人の優しさ・親切レベルの話ですよね。それは同時代的な深夜ラジオとか若者番組みたいなNHKの番組とかでも見られるもので、だからこの差別構造くそだな、とか、こういう運動しようぜっていうのじゃなくて、僕らの優しい心で受け止めてあげようよ、みたいな感じの、彼らが困っているなら支えてあげようよっていうような話で、それはすごく今にもつながるところだなと考えられると思います。多分、Kさんのおっしゃっているソーシャル・ジャスティスって、ある意味での対抗性というか、システムへの介入みたいなものは確かにこの時代でなくなっている、あまり見られない態度だなという、もちろん社会運動・政治運動の中にはあったでしょうが、一般的なマイノリティーの人の目線の中にはないという感覚は受けております。個々人の多様性への寛容で何とかしよう、ですよ。

【塾生K（日韓の社会運動の違いについての質問へ）】

そこが実は私も悩むというか、ハウツーというかツールということでもなく、システム自体がそもそも違うということなので、逆に違うのが当たり前かなと思いつつ。ろうそくデモとか、あるいはこの辺の若者のいろいろな動きとかを見ると、まず今の韓国の若者はすごく権利意識が強いんですね。自分が何かに参加して自分の利益を守るため、権利を守るためには、とにかく行動をするということの意識は割と強いんですね。そこで逆にそれが社会正義のためということよりは、自分の利益のためには労働組合でもなんでも今の若者はどんどん入ったりとかします。結構、組織率高いところにはそういう考え方もあるの

かと思いますが、個人レベルで見ると少し違うかなというようなところを私も学生を日本で教えたりとかする際に感じます。人権意識とか個人でこれが正しいということは分かっているけど、周りの人と一緒に行動するのにすごく抵抗感を感じたりとかすることと比べれば、韓国の人たちは別に知り合いじゃなくても、このためには自分が行動をして集まったりとかすることに躊躇なく参加するところが、肌感覚でそこが違うかなというようなところですが、そこにはいろいろな経験とかはあるかと思っています。

そして社会運動団体のほうも、最近は影響力が弱くなったりとかはしているのですが、一般の人々から支持してもらおうとすることを一番真剣に行動しますね。記者会見などでも、一般の人々が参加するためにはどうするかというようなことをすごく工夫してアクションに移したりとかすることがあるので、その辺もうちょっと韓国のことを紹介しながら先生たちや連合の方たちとも一緒にいろいろ議論できればなと思います。

【事務局】

もしかしたら日本においてはデモンストレーションとか以外にも、もっと別な形でそういう表現をしている可能性があるかどうかですね。ただ単に日本人っておとなしいね、だけじゃ済まない問題だと思います。

【富永准教授】

2000年代、イラク反戦とかだとパレードみたいな言い方をしていましたよね。実質的にはデモをしていたとしても、そういう代替的な言い方ってあり得たのでしょうか。

【事務局】

それがどんどん別な形に変わって行って、労働組合もデモンストレーションよりも政策提言とか、シンポジウムとか、そういう方向にいつてしまっているのかなっていう、そういう方向にいつている可能性はありますね。

【塾生K】

そういった面においては、韓国のデモとかはコンサートに近いかもしれません。踊りがあって、音楽があって、人々が楽しくなるようなプログラムとかが結構充実している。映画祭をやったりとかいうような。祭りに参加するみたいな感覚で運動に出るとかというような感覚も結構あります。もちろん結構激しいところもあるのですが、それよりは一般の人々が参加しやすいという工夫するといった面もありますね。2016年のろうそくデモとかは、ほぼ半分はコンサートみたいなことをやったので、路上やそこら辺で人々が歌ったり

もそうですが、参加しやすいというようなことで、歌手とかタレントたちもすごく参加したりとかする面はあるかなと思いますね。

【事務局】

日本におけるシンポジウムとか別な形での社会への発信というふうな動きはあるのですが、それにしても外に対しての労働組合運動や社会運動の発信というのがほぼ壊滅に近い状態になっているという状況については、一方でそれは深刻に考えないと駄目じゃないかなと思います。特にデモとかを語られることがなくなってきているということに関しては、社会運動への多くの方の参加という観点からどうしていくのかっていうのは考えなければならないと思うのです。

【事務局】

私が感じたことは、このレジュメの2ページ下のほうです。今の議論も非常に興味深くお聞きしていました。世代間の違いというのは、一つ大きな鍵を握っていると思うのですよ。実は私は1956年の3月生まれなので、私自身は当事者として団塊の世代も新人類にも属していないと思っていましたが、新人類に分類する研究者もいるようです。

【富永准教授】

二次分析を行った太郎丸博先生と、見田宗介先生もそのような分類をおこなっています。ものによってずれているところもあります。

【事務局】

私は自分自身が新人類と思ったことは一度もなく、団塊の世代ではもちろんないのだけでも。ただ、団塊の影響を色濃く受けているのかなと思います。新人類って自分よりだいぶ若い人たちのことだって漠然と思っていた。だから新人類と分類されて、最初は、えっと思いました。この分析には、思い当たる節が一つあって、私は日本人の意識、特に政治に対する意識とか、ある意味、非常に先進国の中で見ると弱いと思うのですね。それが背景として主権者教育をかなりある意味、怠っていたことがあり、政治に対して無関心ということや、社会運動に対しても自分が主体であるという意識が希薄になってしまった。それはいわゆるワークルールとかそういう権利教育も全部繋がっています。そして社会運動にも繋がっていると思います。

主権者教育について、5年前に選挙権は18歳以上になりました。これ自体、日本は遅れており、先進国はもちろん、途上国の多くは18歳選挙権ということになって、文科省が方

針を180度変えたのですね。具体的な主権者教育を高校で、急になんか始まった、みたいなことになりました。文部科学省の通達はそれまでどうだったかという、具体的な政治的事象に対しては非常に慎重に対処しましたね。要するに、学校でそういうのは習わない、これは正確には昭和42年あたりからなのです。ということを考えてみると、やはり私は新人類かなって。

自分が中学に入ったのが昭和43年。高校に入ったのが昭和46年です。そうすると、そういう文部省の通達の意向というか影響っていうのは、もしかしたらすごく大きかったのかなと。私が入った高校も、私の入った1年前か2年前、すごい学園紛争があって、という話を聞いたんだけど、そんなの僕が入ったときには、みじんもなかったんですね。同じ学校でそんなことが本当にあり得たのだろうかぐらいの印象を受けたという経験がありました。文部省の通達があって、学習指導要領だとか、教科書だとか、その辺の変化っていうのが世代間の違いに大きく影響している感じがしているのです。

【富永准教授】

議論を稀少化してコメントを返す形になってしまうのですが、すごく多い学生の投稿に、これは深夜ラジオとかでも同様に多いのですけど、教育の場で先生が言う政治的な話にやたらびっくりするっていうのがあるんですよね。つまり先ほどの具体的な政治的事象についての教育は慎重にというか、その流れをすごく継いでいるっていうか、政治的に中立ですらないと思うのですよ。現実から遊離した空間としての学校っていうものを、いかに強く1967年以降、今でいう文科省が形成してきたかということです。

そういう中で、雑談で支持政党とか言うだけで、学生がめっちゃびっくりするみたいなことがあり得るわけで、それが長期的に若者に対して与えた影響というか、教員がストするだけでめっちゃびっくりする。あるいは政治家の名前を出すだけでめっちゃびっくりするみたいな、そういう空間の中で政治への関心っていうのが路上でのストやデモをちょいちょい見るくらいだとしたら、しかもお父さんは長時間労働でずっと家にいないとしたら、確かに政治ってワイドショーで見る政局だけっていうことになっちゃいますよね。それはご指摘いただいたことと、70年代の若者っていうか『ビックリハウス』に出てくるような、深夜ラジオに出てくるような若者的な態度っていうのは、ある意味かなり繋がっているのだらうと思います。ありがとうございます。

【事務局】

③社会運動・労働組合運動への失望感が社会運動への参加を減少させた説ですが、1980年代の日本は組織化されている、ということが、今申し上げた年代の違いとリンクしてる

のかもしれない。1980年代には団塊世代がまだ主導的立場にあった頃であったのかなって僕は考えています。

【事務局】

先ほどの教育のところかというと、最近はともかく現代史ってわれわれのとき全然やらなかったです。学校が現代史を教えることに対してすごく躊躇していたような。テレビのインタビューでもアメリカと戦争してたことも知らないという人が結構いたりしますけど。

【事務局】

昔は、高校の先生が自分の友達呼んできて、現代史の補講じゃないんだけど、正規の授業でやったのだけど、それがすごく面白かった。確かに普通には現代史あんまり力を入れてなかったと思います。

【事務局】

レジュメを見て、2ページの③社会運動・労働組合運動への失望感が社会運動への参加を減少させた説のところ、まず最初に国鉄をはじめとした大規模なスト権ストの失敗というところがあるんですけど、実はその下に労働争議70年代ピーク、と記載もあるのですが、昔、公民と言っていた教科で出てくる労働争議って、実は1950年代・60年代の争議、三井三池炭鉱の争議についてですよ。あるいは近江絹糸ですとか、日産争議とか、労働運動史に残るような大きなストっていうのは、実は50年代・60年代だったりしてたので。争議の数としては70年代が多いんですけど、質というかそういう激しさとかでは実はピークアウトしていたのかなというところを感じました。さらに言えば、国鉄のスト権ストっていうのは極めて特殊なストライキでありまして、ご存じのように、そもそも国の現業職員、ストライキ権がない中でのストライキであったりとか。あとは先ほど申し上げた三井三池とか、日産だとか、近江絹糸だとかのストライキも日本の社会基盤そのものを止めてしまうようなストライキではなかったわけですね。あくまで企業。もちろん支援ストはあったのですけれども、産別内での話であったりするのであって、日本の、特に経済でも国民生活でも根幹をなしている鉄道をそのまま止めてしまおうというストライキとはまた次元が違う。要はそれだけ特殊なストライキであったというところ。さらにはスト権ストに至るまでに、そもそも国鉄、国労がやっていた順法闘争なんかで、市民からすれば国鉄何やっているのだと。実際、上尾事件ですとか、あるいは首都圏の国鉄暴動とか、要は駅を焼き打ちするような一般国民からの反発も受けていたような状況であったので、スト権ストの失敗が、労働運動が市民の共感を失うということには必ずしも、それだけではないのかなと思いました。

それから、その下の1972年の連合赤軍の内ゲバの話ですけれども、こちらもいわゆるこういった系統の社会運動が盛り上がっていたときも、60年代の例えば安保闘争なんかも70年代安保に比べれば60年代のほうが盛り上がっていましたし、こちら辺もだいぶピークアウトしてきたのではないのでしょうか。それと同時に、そういった運動の内容の大きな変節もあって、特に成田闘争や70年代安保にもみられるのですが、組織の左傾化が進んで極左的になって暴力的になっていき、明らかに警察官を殺しに行くような運動とかをするようになって、それも特に成田闘争の時なんかは顕著であったりするわけなので、そのときから既に国民からも見放されていたと。連合赤軍の内ゲバもそうなのですが、それ以前から非常に国民との間で意識の乖離はあったのかなと思います。

最後6ページ目の考察と結論のところに、父親のストライキを見る機会がないのではないかという話があったかと思うのですが、実はストライキをやっている人たちの偏りの問題もあるのではないかと思います。そもそも日本の労働組合の組織率はそんなに高くて、70年代でも3割程度だったというふうに思うのですが、そもそも3割しかない組織率に加え、1978年のストライキの状況を見てみると、実は主要産別で見ると、総評系の組合が全体の88パーセントを占めてるわけなんですね。他の中立労連だとか、同盟系だとかは3パーセント、あるいは2パーセントの世界であって、ほとんどが総評系の組合によって労働争議が行われていたということです。

その総評系の組合が多くストライキをおこなっていたわけで、一般的なサラリーマンの人たちは、そもそも組織化もされてないし、さらに労働争議をやっている産別に大きな偏りがあったということも影響しているのではないのかなというところを感じました。

【富永准教授】

今後もしちゃんと調べさせていただきたいと思いますので、ぜひ資料等あればご教示いただければと思います。ありがとうございます。

【事務局】

最後の偏りということ言えば、北海道は炭労とか全林野とか、地域でストライキする場面があって、それは結構身近なものがあって、それは世代間で引き継がれてきているような感じがしています。その後の息子・娘たちが公務員になっても組合って重要だなんていうふうに引き継がれてきた気がしました。地域性がどうだったのかなって興味深い話だったと思います。もう一つ、団塊の世代が日本の場合、規模が小さいということはあるのでしょうか。人口の規模が例えばヨーロッパと比べて、団塊の世代の層が小さい。そういうふうに聞いたことがあるのですが、そういう話は聞いたことないですか。

【富永准教授】 _____

団塊の世代の層は、どの国でも厚いものだと勝手に勘違いしていましたが、国際比較的にはそうなんです。

【事務局】 _____

欧州だともう少し層が厚いというか、期間が長いというふうなことを聞いたことあるんです。連合本部のメンバー、聞いたことないですか、連合の方。あまり聞いたことないですか。

【塾生M】 _____

私自身、研究者の皆さんのお話を聞く機会もなかなかないので、きょうは非常にいい勉強になったかなと思います。先生のお話の中で若者の政治への関心ということですが、われわれの組合組織に関しても今企業に入ってこられる学生や高卒の方含めてですけれども、政治への関心は低いかなと思います。産業のために私たちの声を代弁していただける政治家を出していくという課題があるのですが、それに向けて関心を高めるためにいろいろやっていかなければならないという課題があります。先生のお話の中で、1975年とか1985年の若者に視点を当てていろいろ研究されていて、まだそこは結論は出てないということなんです。個人主義、私生活中心主義化というようなお話が1970年、1980年の方にあったということで、今の若者にも通ずるものがあると受け止めたところがあるんですが、今の若者との関わりという点で先生のお考えは。

【富永准教授】 _____

多分、普段、連合さんで話させていただいている話のほうが近いと思うんですが、私生活中心主義という傾向は基本的にはそんなに変わらないとしても、今の若者のいわゆる労働運動というよりは社会運動を見ていると、私生活的なものを政治につなげようという感覚はすごく強いと思うのです。例えばジェンダーなどの問題が分かりやすいのでLGBTQのパートナーシップであるとか、例えば生理の貧困とかの問題で、生理用ナプキンが高価である、あるいはパブリックな場所に置いてないから駅のトイレに置けるようにしようみたいな運動が、いわゆるZ世代みたいなアクティビストの人が日本でやっていたりします。個人的なことを政治的なことにするという動きは多分、気候変動みたいな動きとか、SDGsの教育とかもあったと思うんですが、むしろ2010年代以降に非常に強くなっているのかなと思います。

ただそれにしても例えば労働組合組織とかが推進しているような政治参加とは切れてしまっているところがあるというか、例えばLGBTQのパートナーシップに賛成している

というとき、どの議員を選ぶのか、どの政党を選ぶのかっていうところまでは関連付けが難しいかなと、私の観察からの印象ですが考えているところです。恒常的な政治参加と日常のつながりみたいなもの、それこそ杉並区の岸本区長とかがやられているようなことになるのかもしれませんが、ああいった取り組みみたいなものをもうちょっと増やさないとならないのだろうなという感覚はあります。

【塾生G】 _____

今のご説明のところで質問なんですけれども、最近だと個人的な問題を政治的な側面に結び付ける若者の動きが多いと思うんですけど、そこはSNSとかの普及というのが大きくなり大きく影響しているところがあるのでしょうか。今までだと個人的にこれっておかしいよねと若者が思っていたとしても、それをなかなか問題意識として共有できなかった。ただSNSっていうものだと不特定多数の人間とそういうふうに意見を共有できたりっていうところがあるので、もしかすると誰かが個人的な問題として投げたものが不特定多数の中で、同じように疑問として思っていた人がいるということが結びついて、みんなが思っているんだったらそれを政治なり変えてもらえるようなアクションにつなげていこうというような意識とかがって出やすいのかなって気がしたんですが、関係がありますか。

【富永准教授】 _____

もう古い文献になっちゃいますが『ツイッターと催涙ガス』という邦題で『Twitter and Tear Gas』という、SNSでどう社会運動が変わったかという話をされていて、キャンペーンはすごく増えたと。つまり爆発的に共感する、#MeTooとかがそうですよね。もちろんそれでつながりやすくなっただけというのは、特に日本みたいに声を上げづらい社会にとっては、大きかったと思うんですけども、ただそれだけが条件ではなくて、それを支えてくれるような昔ながらの組織がそのキャンペーンを運動化しているみたいな議論があります。質問にお答えすると、SNSっていうのは一つの大きいきっかけではあったらうなと思います。

【塾生G】 _____

それだけでは十分ではない、ということですか。

【富永准教授】 _____

そうですね。例えばオリンピック関連で、問題発言をした元首相を辞めさせるっていうところはSNSでもできて、ジェンダーへの意識を持続的に向上させたり制度を変えたりするのはまた別で、持続的な組織って大事だよって話になってくるのではないですかね。

【富永准教授】 _____

私にこの講師を依頼したのはこういう報告をさせる意図では絶対になかったと思うのです。日本人の社会運動参加はこんなに少なく、それは日本での個人化が影響しているからで、みたいな話を期待されて呼んでいただいたと思うんですが、プロの研究者として連合総研さんとお仕事をさせていただいて、連合を通じていろんな実務家の方々と話させていただいて、しかもこんなに優秀な若手の研究者の方がいる中で、研究者として自分の今、一番関心のある一番先端の仕事を見ていただきたかったというのがあるので。これだけいろんなコメントを実体験の中から、あるいは研究の中からいただいたというのは大変ありがたいことでした。どうもありがとうございました。

高度経済成長期以降の日本人の意識変容は社会運動を衰退させてしまったのか？
：安定成長期において労働組合運動・社会運動はどのように認識されてきたのか

立命館大学産業社会学部 富永 京子

1. はじめに——高度経済成長期以後の消費社会化と対抗性の喪失、社会運動の衰退？

- 経済の安定成長期(1973-1985)：消費社会化(各種チェーン、コンビニエンスストア、スーパーマーケット等の台頭)。「豊かな社会」の到来(岩田 1991)
- 社会の脱物質化・伝統的な価値観からの解放、物質的不満が解消された時代における、従来型と異なる政治参加の台頭。日本では署名、集会参加、政党機関紙購読が1970-80年代にかけて上昇し、非制度的政治参加の中でも「運動」より「依頼・請願」への意識が上昇した(蒲島・境家 2020)
- 対抗文化が衰退・商業化し、「記号化・差異化した消費」が台頭した時代でもあり(山田 2000, 2009; 上野 1987=1992など)、生活=消費という意識の強まりとともに、これまで消費の場に出現しなかった単身女性や若者といったアクターが合理的に生活を「消費」化する過程でもあった(満園 2014)。
⇒「政治の季節」「激突の時代」(1968-1972)以降、「若者が消費社会の担い手となったために対抗性が失われ、人々が政治に背を向けた」とする議論はとりわけ社会学者による研究・評論において数多く見られてきた
⇒「人々が政治に背を向けた」という指摘は1970-80年代の若者に本当にあてはまるのか？さらに言えば「消費社会が人々から対抗性を奪った」という指摘は1970-80年代の日本を語る上で本当にあてはまるのか？

2. 先行研究——社会学における1970-80年代認識の「特殊性」

1970-80年代に生じた「社会運動衰退した説」をまとめると……

- ①人々の個人主義化・私生活中心主義が人々の公共性を衰退させた説
 - 1970年代に顕著にみられる変容として、1970年代以降に価値観の次元で手段的価値(勤労・節約・効率性・計画的)から即時的価値(現在中心・情緒・余暇志向・私生活優先)への移行。若い世代になればなるほど情緒志向・現在中心志向へ。「社会奉仕型」人間の現象と「私生活」人間の増加(国民性調査)。「みんなで世の中を良くする」1970-80年代にかけて減少(NHK「日本人の意識」)。国の繁栄や公共への奉仕より個人の自由を重視する時代へ(佐々木 1985, 上野 1985, 綿貫ほか 1986, 安丸 1995)
 - 1960年代から引き続き、住民運動から生じた革新自治体が継続して見られ、福祉政策も浮上するもの(1973年福祉元年)、1970年代後半になり下火に。かつて革新政党、平和・住民運動だった浮動票が「柔らかい自民党支持」になり保守回帰し、「経済成長」と「生活保守」を政府に期待するようになる。福祉や地域社会への企業(ないし労使協調型の組合)の進出。企業の持ち家補助によるマイホーム主義、企業中心社会による私生活中心主義の台頭(大嶽 1994, 上野 1985, 大門 2015, 田間 2015, 熊沢 1995)。
- ②豊かな社会が人々の対抗性を衰退させた説(①に関連)
 - 耐久消費財をめぐる格差は1970年代にほぼ解消。所有を通じた差異化と平等化の繰り返しによって、さらに新たな耐久消費財を手に入れるために所得を増やす……といった観念に支えられる人々の生活。「稼得」と「消費」中心の生活観念が都市と地方とを問わず浸透(金子 1985, 大門 2015)。大人のみならず子どもまで、消費を通じた「人並み」意識の形成がおこなわれた時代でもあった(岩田 1991)
 - 世代という変数の重視。1960年代における対抗文化の担い手が1980年代に企業社会に参入し、消費社会を率先して主導する存在となったことにより、1970年代にその「対抗性」を失い、保守化・脱政治化した(山田 2000; 小谷 1993; 小谷・土井・芳賀・浅野 2011)。「現代の文化変動の機動力として、世代闘争を無視することができなくなっている」(1971年『社会学評論』青年問題特集)
- ③社会運動・労働組合運動への失望感が社会運動への参加を減少させた説
 - 1975年に国鉄をはじめとした大規模なスト権スト失敗。労働運動が市民の共感を失う。専売、電電、国鉄民営化(大嶽 1994, 庄司・三宅 1985, 道場 2015など)。
 - 労働争議件数は1970年代がピークで、1980年代でも1960年代よりは多い。労働者の組織化も1980年代>1960年代で、むしろ1980年代が最も組織化されている。一方労組の対抗性は薄くなり、労使協調型へ(庄

司・三宅 1985, 渡辺 1988)

- 1972年の連合赤軍「内ゲバ」により、若者が政治から遠ざかるとする議論も (伊藤 2015など)
- 1970年代から1980年代後半。至上命題としての共産主義への嫌悪感から生じた「正しさ」への懐疑と相対主義 (北田 2005)。戦後民主主義的な「正しさ」への揶揄と消費社会の享受 (山本 2020)

3. 分析枠組と分析対象

3-1. 世代間差異への着目

- 公共性・対抗性の衰退、個人主義化、消費社会の担い手化、私生活中心主義化といった社会意識の差異は、「団塊世代」(1944-1953生)以前と「新人類世代」(1954年-1968生まれ)¹以後で最も大きい (NHK放送文化研究所編 2004)。下世代から上世代が従事している労働組合運動、社会運動、あるいはそこに内在する公共性・対抗性・集団主義はどのように映るのかを検討したい。
- 1975-1985年を対象として、当時刊行された「若者雑誌」を検討する。当時の若者たちの生活に即した投稿を書く「読者投稿雑誌」を対象とする。生活に即した投稿といっても内容や形容はさまざま (批評的に日常を見るもの、「笑い話」にするもの、悩み相談の体裁を取るもの……)であるが、その「書かれ方」から当時の労働組合運動、社会運動に対する認識、また公共性・対抗性の衰退、個人主義化、消費社会の担い手化、私生活中心主義化といった社会意識の変容が明らかになるのではないかと。

3-2. 対象としての雑誌『ビックリハウス』

- 1975-85年に刊行された月刊誌。読者は男女半々で、読者の平均年齢は例年18歳 (ビックリハウス・レポートより)。読者投稿が大半を占め、全国各地に読者・投稿者が存在する。
- 編集者として萩原朔美 (映像作家、劇団天井桟敷、現・多摩美術大学名誉教授、1946生)、榎本了彦 (編集者)、高橋章子 (編集者)、糸井重里 (コピーライター) など。寄稿者として村上春樹 (小説家)、日比野克明 (現・東京芸術大学学長)、香山リカ、竹中直人など多数。編集者らは1980年代以降、美術系大学教員として教鞭を執るか、「若者の代弁者」としてテレビ番組、広告批評誌等で活躍するという経緯を辿った。
- 1970-80年代「消費社会」との関連性。渋谷パルコ (西武グループ) を中心とした広告文化
- 一方で、創刊時の編集者たちにはオイルショック後の低成長期という時代認識の方が強かった。「若者は不景気で金がないって言うのにさ、それを誘う広告は華やかなんだよ。」(萩原朔美)
- 対抗性・政治的な性格の不在 (外山 2017; 富永 2020)
- 編集者は、創刊時のスタッフがほぼ「団塊」世代に属する (かつ、全共闘運動かそれに近い運動経験を持っている) のに対し、1980年以降はほぼ「新人類」世代に属する。読者はほとんどが10-20代 (平均18歳前後) であり、「新人類」世代。
- 読者の男女比はほぼ半々。読者対象調査によると、平均年齢は18歳。
- 読者投稿が誌面の多くを占める「投稿雑誌」であった。「投稿」といっても、その内容は幅広く、批評・評論・随筆を書くコーナー「フルハウス」やお題となる単語を用いて物語を紡ぐコーナー「3 WORDS CONTE」、比較的短文で日々の体験や所感を綴る「ビックラゲーション」や「おもこ」、「ヘンタイよいこ新聞」など幅広い。しかし、基本的には「最近ビックリした出来事」(「ビックラゲーション」) や「身の回りのキモチワルイこと」(「ヘンタイよいこ新聞」) など、心情の吐露や身の上相談とは言い難い、物事の印象や感想を問う短文中心のコーナーと、物語を投稿する「エンピツ賞」や写真や絵画、自作の音楽、立体制作物を送る創作中心のコーナーで占められる。
- 第1号の発行部数は5万部、ピーク時の1983年で20万部、休刊となる1985年には10万部を刊行。
- 当時としては珍しい女性編集長 (高橋章子)。高橋就任後の編集部も女性が多数を占め、1978年には5名中4名、1979年には5名中5名、1980年には5名中4名、1981年・1982年には6人中5-4人、1983年には4名中2名が女性、1984年には5名中3名、1985年には4名中2名が女性であった。

4. 事例分析: 「新人類」から見た社会運動と労働組合運動

では、「新人類」である若者たちは、どのような形で年長者たちの社会運動を記述し、それを形容したのだろうか?

本報告ではとりわけ、若者たちが遭遇し、記述した社会運動として「デモ」を、労働組合運動として「ストライキ」(予備的に「組合」) を検索した。1975年から1983年までのデータを検討したところ、「スト (ストライキ)」が合計48件 (平均5.33件)、「デモ」が合計25件 (平均2.77件) であり、抽出語として出現するものはかなり少ない。しかし、抽出語上位100位だけを集計した場合でも出現回数の中央値は年間抽出数73であった

¹ 太郎丸 (2016) の「日本人の調査」二次分析を援用

め、そもそも語のばらつきがかなり大きく、本雑誌上において若者たちはかなり雑多な内容について書いていると言える。

表1 頻出語リスト

	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983
スト (ストライキ)	5	6	5	8	6	1	13	0	4
組合	1	1	11	4	5	2	5	1	0
デモ	3	4	2	5	6	0	1	2	2
総抽出語数	747, 949	968, 044	1, 125, 648	1, 143, 901	1, 165, 064	1, 193, 050	1, 306, 623	1, 053, 785	1, 182, 942

(1975年2月号より1983年12月号までの『ビックリハウス』雑誌を全テキスト化し、KH Coderにて「スト or ストライキ」「デモ or デモンストレーション」「組合」で抽出。ただし、例えば「テスト」や「ストレートパーマ」など、文脈から関連しないと判断したものは除いている。

①日常的に目にしたスト・労働組合運動に対する言及

第一に見られたのは、実際に日常生活の中で見たストなどの活動について記述するというタイプの投稿である。中でも、1975年の国鉄のスト権ストのインパクトはやはり大きい。いずれも生活者・消費者の日常風景という印象であるが、労働者との関係性があるとその評価も少し異なってくるようだ。例えば、読者層が中学生～大学生であるために、学校のような場でストライキを見るタイプの言及が相対的に多くみられる。

また、労働者としての教員が持っている他の一面に対する「ビックリ」や「いじましく、カワイイ」さまが記述されているが、ストライキや組合活動に限らず、生徒（読者）たちにとって「教員の教員らしくない姿」は格好の投稿材料にされていた。例えば教員が授業中の雑談として語る「戦時中の武勇伝」などもよく投稿・掲載されている（富永 2023a）。

②過去の回想として現れる「スト」

「日常の風景」としてのストライキに言及する声は年々少なくなっていくもの（媒体側の性質が変容したこととの関連も強いと考えられる）、回顧録的や実体験の中で「ストライキ」「スト」「組合」が出現することも珍しくない。「する側」である場合もあれば「される側」である場合もある。

「デモ」の記述に関しては、編集者や寄稿者らが過去の学生運動体験を語ることが多いが（富永 2020）、ストに関しては体験談としてはデモほど言及されていない。この点については、一回の大イベントとして語られる学生運動とは異なり、そもそもストライキがそれなりに日常的な行為であり、敢えて語りの俎上に上がるほど特別なことではなかった、読者層である若者たちに訴求するような内容ではなかったといった点が考えられる。

③「ネタ」「洒落」「創作」の材料として使うもの

いわゆる「創作」や「面白い話」、言葉遊びの題材としてストを題材とする投稿が、特に1978年以降は増大した。例えば造語・略語を作る「全流振」のコーナーでは、以下のようにストライキを用いた言葉遊びの投稿が見られる。

上記の通り、他愛もないネタがかなり多いのだが、半分程度が国鉄・私鉄に関するストライキであることが興味深いといえ、興味深い。読者の中心層である若者にとっては、他産業よりも鉄道のストライキの影響が強く、ストライキ＝鉄道という印象がやはり大きいのだろうか（実際の産業別のストライキ数と比較まではしなくとも、当時の鉄道会社のストライキの盛り上がりというか、一般市民レベルでの認知などについてはお伺いしたいです）。

もう一点は、創作の題材として「スト」や「労働組合」を使うもの。社会運動や組合運動といったモチーフは、現実の語り（①②）に比して創作のモチーフとされる頻度がそれなりに高い点は興味深い。劇的である、対立構造が明示的で話を作りやすい、といったところなのか。

5. 考察と結論

1975-1985年の若者たちにとって、ストライキ、労働組合の存在は日常的にはとくに公共空間において目にする行動として、また、より年長者である編集者や寄稿者がかつて従事した行動として、あるいは創作の中の出来事として認識されていた。

日常的に目にする労働組合運動は主に国鉄・私鉄のストライキ、あるいは教員の組合活動になる。ここで例

えば「父親」をはじめとする家族の組合活動やストライキの話が投稿されても良さそうなのだが、その存在がない（さらに言えば、父親の仕事や会社の話も必ずしも多くない）のが現時点では大変興味深い。この点は同時代の家庭の個人化を分析した岩田正美、木本喜美子の分析が参考になるが、高度経済成長期から安定成長期にかけてサラリーマンの長時間労働が定着し、父親が家庭内において「そもそもいない存在」として定着した点（木本 1995）、また冷凍食品や電子レンジなどの耐久消費財の普及で家族全員が揃う食卓が減少し、家族の生活時間にかんがりのばらつきが生じた点（岩田 1991）などが考えられる。

頻繁に目にする機会があればその行動内容について理解はするもので、例えば「ストライキ」を用いた言葉遊びや創作などはそもそもストライキの意味を知らなければできないわけで、そういった意味での理解は若者にも十全に存在した。重要な点として、例えば学生運動やウーマンリブ、環境運動といった他の同時代の社会運動と対比して、労働運動に対する冷笑的な声、攻撃的な声が極めて少ないことはかなり興味深い（富永 2020, 富永 2022a, 富永 2023b）。このように、1975-1985年時点の若者において労働運動・社会運動に対する理解や寛容性に温度差があった点は、単純に「公共性・対抗性が衰退したから運動全般への無理解が進んだ」では解釈しきれない点であろう。

一方、この点は「個人主義化」や「消費生活の担い手化」「私生活中心主義化」といった当時主流とされる価値観と、労働組合運動の掲げてきた課題や目標の間に大きな齟齬がなかったからこそ冷笑・攻撃を免れられたという点も考えられる（渡辺 1988）。戦後民主主義的な「正しさ」（山本 2020）を女性運動や、環境運動、学生運動が代表していると認識され、忌避されてしまったのだろうか。

参考文献

- 北田暁大, 2005『嗤う日本の「ナショナルリズム」』NHK出版。
- 山田真茂留, 2000, 「若者文化の析出と融解——文化志向の終焉と関係志向の高揚」宮島喬編『講座社会学七文化』東京大学出版会。
- , 2009『「普通」という希望』青弓社。
- 小谷敏（編）1993『若者論を読む』世界思想社。
- 上野千鶴子, 1987=1992『<私>探しゲーム：欲望私民社会論』筑摩書房。
- 上野輝将, 1985「ナショナルリズムと新保守主義」歴史学研究会・日本史研究会編『講座 日本歴史 現代2』東京大学出版会。
- 蒲島郁夫・境家史郎, 2020『政治参加論』東京大学出版会。
- 満園勇, 2014, 「消費史研究というフロンティアの可能性：日本近現代史の場合」『歴史と経済』57(1): 30-37。
- 山本昭宏, 2020『戦後民主主義』中公新書。
- 大澤真幸, 1998『戦後の思想空間』ちくま新書。
- 大嶽秀夫, 1994『自由主義的改革の時代』中央公論社。
- 綿貫譲治ほか, 1986『日本人の選挙行動』東京大学出版会。
- 竹内洋, 2003『教養主義の没落』中央公論社。
- 庄司俊作・三宅明正, 1985「現代社会運動の諸側面」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史 現代2』東京大学出版会。
- 道場親信, 2015「戦後日本の社会運動」岩波講座『日本歴史』
- 大門正克, 2015「高度経済成長と日本社会の変容」岩波講座『日本歴史』
- 田間泰子, 2015「戦後史のなかの家族」岩波講座『日本歴史』
- 伊藤公雄, 2015「メディア社会・消費社会とポピュラーカルチャー」岩波講座『日本歴史』岩波書店。
- 小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編 2011『若者の現在——政治』日本図書センター。
- 富永京子, 2020「若者文化における政治への関心と冷笑——雑誌『ビックリハウス』を事例として」『年報社会学論集』33: 12-22。
- 富永京子, 2022『『書くこと』による読者共同体の生成メカニズム——若者雑誌『ビックリハウス』の投稿を事例として』『ソシオロジ』67(1): 99-115。
- 富永京子, 2022b「「からかい」から見る女性運動と社会運動、若者文化の70年代——雑誌『ビックリハウス』におけるウーマン・リブ／フェミニズム言説を通じて」日高勝之編『1970年代文化論』新曜社。
- 富永京子, 2023a「1970-1980年代若者文化における「戦争語り」の変遷：雑誌『ビックリハウス』を事例として」2023年度戦争社会学研究会研究例会資料。
- 富永京子, 2023b, 「1970-80年代の雑誌を通じた「性の解放」と「個の解放」——『ビックリハウス』における女性の身体・キャリア言説を通じて」『社会学評論』294号。
- 竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子, 2014『日本の論壇雑誌：教養メディアの盛衰』創元社。
- 佐々木隆爾, 1985「世界戦略としての新安保体制」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史 現代2』東京大学出版会。

太郎丸博, 2016『後期近代と価値意識の変容』東京大学出版会.
安丸良夫, 1995, 「現代の思想状況」『岩波講座 日本通史21』岩波書店.
熊沢誠, 1995, 「企業社会と労働」『岩波講座 日本通史21』岩波書店.
NHK放送文化研究所編, 2004, 『現代社会とメディア・家族・世代』新曜社.
渡辺治, 1988『現代日本の支配構造分析——基軸と周辺』花伝社.
岩田正美, 1991『消費社会の家族と生活問題』培風館.
木本喜美子, 1995『家族・ジェンダー・企業社会——ジェンダー・アプローチの模索』ミネルヴァ書房.

[謝辞]本研究は電気通信普及財団、サントリー文化財団、公益信託高橋信三記念放送文化振興基金、財団せせらぎ、稲盛財団、三菱財団、放送文化基金、小笠原敏晶記念財団、科学研究費補助金の支援による。